1971.4.8 明治大学新聞

寄稿 新聞学会闘争への提起

大新解体闘争として

擬制の「われわれ」の解体の中から

——関係についての原始人の経験がおだやかな愉快なものでなかったのは事実である。

しかしながらわれわれが青白いかげとして、あるいは顔を持たない数として他人のお情けで生きているぐらいなら、むしろたとえ暴力に悩まされようと真に生を生き抜く存在として生活する方がどれほどすぐれているかわからない。——

マルティン・ブーバー「我と汝」より

われわれが「大新解体!」と叫ぶ時、それは第一義的には、「粉砕」であり得ず「奪還」であり得ないところの、ひとつの戦略を意味しているのである。

すなわち、いかに強弁しようとも、その時々の権力に対する盲従性とオポチュニズムを本質とする以上、「御用新聞」以外の何者でもない「明治大学新聞」のありかたと、その論調（「自由について語ることは自由だが、自由に振舞うことは許されない」）に対してその「内部」からの自己否定を通じた総叛乱の意識を組織し、貫徹していくことである。

それはあくまでその一点に「居着き」、「こだわる」、「個別改良主義的」闘争である。

われわれが「大新解体!」と叫ぶとき、次に浮かんでくるのは「全共闘」と「帝大解体」である。大学権力とそれに支えられる腐敗せる権威主義的アカデミズムに対する根底的思想変革闘争に立ちあがる「全共闘」であり、その発する「帝大解体」である限りにおいて（無論その当然の帰結としての、一切の権力と権威を否定する社会変革闘争においても）われわれはその一環を任うものとしてあることを宣言しておこう。現在自由をいい反権力を語るものにとってこれが最低限の位置確認であることも。

「体制派ゴキブリ諸君」よ、外面のいい言葉をまき散らすことはやめて、せめて堂々と「偏向」したまえ!

「大新解体」を叫ぶわれわれにとって現時点で真に問題なのは「大新解体」を叫ぶ「われわれ」である。関係する「われ」と「われ」がいかに「われわれ」となるかである。「われ」と「われ」の関係にとって「明治大学新聞」とは何であったのか。

結論から先にいおう。「明大新聞」とは「われ」（非編集員＝学生としての）が個々にそれとのみ関係を結ぶことによって「われ」を「われ」（編集員としての）たらしめるが、「われ」の存在・動向・変転の一切とは所論、無縁不変に存在し続ける限りにおいて、個々の「われ」にとっての権幻想威＝偶像神であったのである。

—ある非権威主義的革命家は「神」が否定さるべき理由は、何よりも、それ（神）を信ずることによって人は本源的関係を「私」と「神」のあいだのみに求め、他の生きている人間との関係をかえりみなくなるところにあると看破した。—

さて「共同体」のあり様には二種あるといわざるを得ない。そのひとつは前記のように、本来的には分裂・対立し続ける諸個人がアトム化されたまま、ある幻想の権威のもとに画一的・一元的大同団結をとげる場合であり、いまひとつは、諸個人が、本人にとっては個別化・他人にとっては異質化を推し進める中でなしとげられる多様かつ多元的連合の結実される場合である。

前者の（それとはむしろ「共同体」というより「利用体」と呼ばれるほうがふさわしいだろうが）そのもっとも現在的かつポピュラーな例が「外には民族、内には国家」としてあらわれる「国家共同体」である。

この意味において国家とは「新しい神＝教会」として在る。両者に共通する現象は「抽象的・幻想的権威に対する諸個人の帰属＝統合」であり、「生きている諸個人間の不和と分裂」である。

「共同体」の「内」と「外」は深厳なる壁によって分け、識別され、「アウトロー、異端」とみなされた者には容赦ない制裁が加えられる。諸個人間には利用—被利用の関係のみ存在し、相互疎外と個人のアトム化を呼ぶ。そしてその砂を噛むような疎外関係は、権威への盲目的な、かつ強烈な帰属願望として還元され、体制＝「共同体」を再生強化していく。

以上の様相の全てが「幻想共同体」たる「明大新聞」とそこにおける「われわれ」の関係において見出されるのである。

「外に排他・侵害性、内に選民・階級性をもつ」という「明大新聞＝学会」とはまさしく一個の「国家」であったのだ。

以上の総括から、今重要なのが幻想の権威のもとに真の「共同性」を喪失した「われ」と「われ」が、擬制の「われわれ」を解体して真の「われわれ」を生み出していく作業であることが明らかになったのであろう。それなくして戦略も戦術もないのである。

繰り返していえば、われわれの闘争の全てが「大新解体を叫ぶわれわれ」が「大新における＜われ＞と＜われ＞」をいかに否定＝自己解体して行くかにかかっているのだ。

したがって必要なのは「思想やイデオロギー」の注入ではなく、以上の作業のために「思想やイデオロギー」が何を成し得るかなのである。

この視点、すなわち「われ（自）」と「われ（他）」の関係の破壊とその新生（＝解体）を目標とする立場によって現実の闘いを推し進める時、いわゆる「共闘」なるものが、従来そのもたされてきた言葉の意味を大きくのりこえる形で問題となるのである。

「共闘」とは「われ（自）」と「われ（他）」の異質性、相互批判性の相互保証という前提のもとに「ほんもの」の「共同体」結実に向う手段であって、この自他の緊張関係の中にのみ存在する。他を「切り捨て」「とり込む」ことによってこの関係を解消する一切のもののゆくえは、「ほんもの」の「共闘」と「共同体」の正反対のもの、すなわち権威幻想的共同体（＝国家）と宗派にしかないのだ。

権威幻想的共同体（＝国家）を反社会的、画一的、利用体とするなら、われわれの求めるものは社会的、連合的共同体である。われわれにとって「共闘」とは単なる方便ではなく、自由社会実現の手段＝目的、すなわち社会の再構成原理なのである。

さて、現在の大学闘争が「学生」であることを拒否した「学生」によって担われなければならない状況にあることはそのまま「編集員」のあり様につながるものであることをここで確認しておこう。

「認識者、思想者」として の「編集員＝批判者」たれ

「特権者・傍観者」としての「編集員＝記者」を拒否せよ!

しかして「認識者・思想者」としての「編集者＝批判者」たることに確執せよ!

これが新生明大新聞の「編集員＝記者」に課せられる義務の全てである。では「明大新聞」と学会は今後いかなる形と内容において組織されるべきなのだろうか。

①「明治大学」に権力に拠らない情報の回路を形成すること。

②大衆自律への触媒としての自己＝学会を確立すること。

③自己解体を推し進める諸個人・諸団体との全面的かつ「共闘」的連合をなしとげること。

④「明大ナショナリズム」と「アカデミズム」に対して根底的思想闘争を展開すること。

⑤諸支配権力の弾圧と居直りを許さない実力を組織すること。

⑥以上の実現のための現在的行動機関として「大新解体行動会議」を結成すること。

「大新解体共闘委」とは未来の通信員、編集員、現在の戦闘員としての「闘争委員」によって組織され「大新解体行動」を媒介として「共闘」する大衆的反権力共同体でなくてはならない。この大衆戦闘組織たる「大新解体共闘委」に学会関係者による「マップ共闘」と現編集部の二結合と共闘を保証するものとして「大新解体共闘会議」は明大新聞が大衆と結ぶ集約点である。

「大新解体共闘会議」は各「共闘委」「マップ共闘」「編集部」間の、あるいは「読者」と「編集部」の位相と志向性の異同を保証しつつ、明確化するとともに、それらを溶し合う「るつぼ」でなくてはならない。「大新解体共闘会議」をぬきにした一般的「大衆」との関係は一切考えられない。

「大学関係者・父兄・学生に広く愛される新聞」などくそくらえ!そんなものが明確に利害と思想の異なる諸階層の上に成り立つと思えるとすればあなたはよほどオメデタイか、われわれにとって許し難い存在かのどちらかに決まっている。

われわれの「新聞」のもたらすものはちょうどそれと反対のものかも知れない。一切の擬制の解体はひとを激しい私怨と個人的暴力の世界に落し込むだろう。しかし熱核戦争とアウシュビッツに代表される巨大で冷ややかな国家的暴力に、計画的に何の感情も交えず、チミツに抹殺されていくのとどちらが「人間的」であろうか、まさに野坂昭如の言うごとく「ゲバ棒と原子爆弾は比較にならん」のだ。

たしかに「新聞 学会 闘争」とは、その当初から現在に到るまで「私怨」によって支えられてきている。「私怨」をこそ、それが真に支配権力の暴力に対峙する開力を開示しうるがゆえに、組織すべきなのではないか。

いずれにせよ牢獄の必要性をいまわれわれは身をもって感じている。

以上の記述からもわかる通り、われわれには「新聞」を出す気はあっても、「新聞」を出さねばならないというような思い込みや、「新聞」のみに固執するココロはさらさらない。

大向うから「不真面目である」「無責任!」の声がかかりそうだが、ちがうのだね、このことが編集部総体に確認されたこと自体がひとつの闘争の成果であるといっていいほど、それは真面目なものだ。

結論はこうだ。われわれが飯を食わねば死に、そのためには働かねばならないということ（生存—労働）のもつ重み、世界と自己があるがままであり得るように両者を変えねばならない、そのためには自由でありたいということ、（生命—活動）への渇え、その双方の前にあって「新聞」とは「生活—仕事として解体の対称としての重みしかもち得ない。」

誤解しないでほしい。だからといってわれわれは「新聞」と「学会」、そしてその解体闘争を投げ出すようなことはしない。

「ほんもの」でないものを「ほんもの」にするためには、それに「居つき」「とりすがり」「ニセモノ」を追い出す以外にはないのだから。

「内なる異物の追放」こそ自己解体の内実であり世界変革への道である。

—だれがおれを「記者」（労働者、農・漁民、サラリーマン等々）と呼ぶのか?—

解体し解体し解体し尽して自らの真に拠るべき「根」を求め「根拠地」を求める時、ついにそれを求める運動以外のどこにも「根」は存在しないことをひとは知るだろう。

運動とは「関係」であり、権力との関係において「共闘」である。

初原までの自己解体を通じての学会＝帝大＝国家解体、これこそ「明大新聞学会闘争」を貫く赤い糸でなければならない。「強権に確執する」ペンと剣で闘いぬこう。

マップ共闘個人
遠野いづな